

2016 年度

国際日本学部演習案内

School of Global Japanese Studies

明治大学

Meiji University

目 次

ゼミナール（演習）とは何か	1
1. 演習入室試験受験上の注意	2
2. 2016年度 国際日本学部 演習一覧	3
3. 演習入室選考試験日程	4
コード	
01 Kathleen Allen	5
02 Svetlana Vassiliouk	6
03 呉 在 烜	7
04 小笠原 泰	8
05 金 ゼンマ	9
06 小 林 明	10
07 小 森 和 子	11
08 佐 藤 郁	12
09 鈴 木 賢 志	13
10 瀬 川 裕 司	14
11 田 中 牧 郎	15
12 旦 敬 介	16
13 張 競	17
14 長 尾 進	18
15 野 村 清	19
16 萩 原 健	20
17 長谷川 文 雄	21
18 姫 野 伴 子	22
19 廣 森 友 人	23
20 眞 嶋 亜 有	24
21 溝 辺 泰 雄	25
22 美濃部 仁	26
23 宮 本 大 人	27
24 森 川 嘉一郎	28
25 山 脇 啓 造	29
26 横 田 雅 弘	30
27 吉 田 悦 志	31
28 渡 浩 一	32
29 R y a n W a r d	33
4. 演習入室試験申込手続きについて	34

ゼミナール（演習）とは何か

国際日本学部長
横田 雅弘

私は、大学での学びの真骨頂はゼミであると思います。なぜなら、ゼミは「主体的に学ぶ」という大学での学びのスタイルが最も強く求められるものだからです。ゼミでは、指導教員が示す大きなテーマに関心を寄せる仲間が集まり、20人を超えない小さなグループで、個々の学生が自ら設定する具体的なテーマに沿って活動していきます。ゼミによってその運営の仕方は多様ですが、与えられた課題をこなすのではなく、自らの興味をゼミの仲間や教員に投げかけ、コメントをもらいながら関連の本を読んだり、データを集めたりして深めていくという基本は共通しています。自分の疑問や関心からスタートした課題が深まってくると、人間はさらにそれを追求していきたくくなります。こうなると、ちょっと面白そうだという程度では感じる事のなかった探求心が湧き上がってくる。これが主体的な学びを発動させるドライブであり、より高い完成度を求めて苦悩するエネルギーになるのです。それは、単に面白いことをやるというだけではありません。この違いは、ゼミ活動の結果をまとめて作品（卒業論文など）に仕上げていく最後のプロセスによく表れています。すなわち、自分のやってきた活動について自己と対話し、省察し、ゼミの仲間やより専門的な知識と経験をもつ教員からのコメントを受け、推敲に推敲を重ねて自分が納得する言葉に表現していくという生みの苦しみを味わう最後のステージです。これは自分一人でやろうとしてもなかなかできるものではありませんから、そこにゼミの大きな意味があるのです。しかし不思議なことに、一度この体験をすると、社会に出て新しい課題に出会ったとき、それを面白そうだと感じて立ち向かっていく勇気が湧いてくる。自分一人でも、あの時ゼミでやった身体感覚が再び目覚めてくるのです。「自分は大学で何を学んだのか？」と自問自答する時、その回答の多くがこのゼミ活動に見出されるのは、このような身体感覚を身につけるからだと言えるのではないのでしょうか。

一方、ゼミの仲間たちが互いに助け合い、時には真剣に考えをぶつけ合い、教室で、居酒屋で、合宿で、時に寝食を共にしながら友人としての深いつながりを築くことも、ゼミの活動を忘れがたいものになっています。先に述べた主体的な学びの経験が、ゼミのメンバーが互いに触発し合い、切磋琢磨することによって同時に起こってくるひとつのシナジーの経験であることが、この学びを格別のものになっているのです。

国際日本学部の先生方は、専門は多様ですが、それぞれその道の優れた研究者であり、ゼミ活動は魅力に溢れています。この学部では、ゼミは必修ではありませんが、多くの皆さんがゼミに参加し、おおいに自らの『個』を鍛え、大学で学ぶ醍醐味を味わっていただけたらと思います。

1. 演習入室試験受験上の注意

演習入室を希望する者は、10月24日（土）に行われる全体ガイダンスに出席の上、希望する演習の個別ガイダンスに参加し、理解を深めた上で入室試験を受験してください。なお、受験にあたっての注意事項は以下のとおりです。

- 1 各演習の募集人員は、10～15名です。
- 2 入室試験の申し込みは、Oh-o!Meiji ポータルページに配信されるアンケートを利用して、各期限内に手続きをしてください。（但し三次試験は別）。
詳細は 34 ページ以降を確認してください。（締切厳守。期限を過ぎた場合、申し込みをすることはできません。）
- 3 演習入室試験日程等演習に関する重要なお知らせはすべて Oh-o!Meiji ポータルページへ配信します。演習入室試験実施期間中は、随時確認するようにしてください。
- 4 受験後に演習を変更することはできません。ただし、4月に募集する新任教員等の演習への変更は除きます。
- 5 合格が決定した者は、それ以降の受験資格を失います。ただし、4月に募集する新任教員等の演習への入室試験に限り、既に合格が決定した演習の担当教員の下承を得たうえで、受験することが認められます。
- 6 同一募集期間内に複数の演習を受験した者は、すべて無効（不合格）となります。
- 7 4月に募集する新任教員等の演習に入室を希望する場合も、今回の演習入室試験を受験することは可能です。ただし、4月に募集する新任教員等の演習入室試験の受験を希望する場合の取扱いは、各担当教員に個別ガイダンス等を利用して事前に確認して下さい。

2. 2016年度 国際日本学部 演習一覧

コード番号	氏名	職名	担当科目
01	Kathleen Allen	教授	英語学
02	Svetlana Vassiliouk	准教授	国際関係論
03	呉 在烜	教授	日本的ものづくり論
04	小笠原 泰	教授	日本のビジネス文化
05	金 ゼンマ	講師	アジア太平洋政治経済論
06	小林 明	准教授	国際教育交流論
07	小森 和子	准教授	日本語教育学
08	佐藤 郁	講師	ツーリズム・マネジメント
09	鈴木 賢志	教授	日本社会システム論
10	瀬川 裕司	教授	映像文化論
11	田中 牧郎	教授	日本語学
12	旦 敬介	教授	ラテンアメリカの歴史と文化
13	張 競	教授	比較文化学
14	長尾 進	教授	武道文化論
15	野村 清	教授	広告産業論
16	萩原 健	准教授	舞台芸術論
17	長谷川文雄	教授	コンテンツ産業論
18	姫野 伴子	教授	日本語教育学
19	廣森 友人	准教授	心理と言語
20	眞嶋 亜有	講師	日本表象文化論
21	溝辺 泰雄	准教授	世界のなかのアフリカ
22	美濃部 仁	教授	宗教と哲学
23	宮本 大人	准教授	アニメーション文化論
24	森川嘉一郎	准教授	日本先端文化論
25	山脇 啓造	教授	多文化共生論
26	横田 雅弘	教授	異文化間教育学
27	吉田 悦志	教授	江戸学
28	渡 浩一	教授	日本の文化伝統
29	Ryan Ward	講師	比較宗教論

* 2015年9月24日現在の一覧です。担当者が変更となる場合もありますので、必ず全体ガイダンスで確認してください。

3. 演習入室選考試験日程

*以下の流れで選考試験は実施されます。

- 1 全体ガイダンス 10月24日(土) 10:00～
[低層棟 ホール]
- 2 個別ガイダンス 10月24日(土)～29日(木)
[日時及び会場は別途アナウンスします]
- 3 入室選考試験
 - (1) 一次募集
 - ①申込受付 10月30日(金) 9:00～11月4日(水) 10:00
[申込方法] Oh-o! Meiji ポータルページのアンケート機能
 - ②選考試験 11月14日(土) 10:00～
[試験会場] Oh-o! Meiji で確認すること
 - ③合格発表 11月16日(月) 13:00
[発表場所] 高層棟1階インフォメーションボード
 - (2) 二次募集
 - ①個別ガイダンス 11月17日(火)～11月19日(木)の昼休み, 5, 6限
 - ②申込受付 11月20日(金) 9:00～11月24日(火) 10:00
[申込方法] Oh-o! Meiji ポータルページのアンケート機能
 - ③選考試験 11月28日(土) 10:00～
[試験会場] Oh-o! Meiji で確認すること
 - ④合格発表 11月 30日(月) 13:00
[発表場所] 高層棟1階インフォメーションボード
 - (3) 三次募集
 - ①申込受付 事前の申し込みは不要です。二次合格発表時に選考試験の概要をお知らせしますので、その指示に従ってください。
 - ②選考試験 12月 1日(火)～12月 7日(月)の期間中いずれか1日
[試験会場] 日程及び会場の詳細は掲示板で確認すること。
 - ③合格発表 各演習の先生に試験当日に確認してください。

*各演習の概要については、次ページ以降を確認してください。

01 Kathleen Allen 教授

1. 演習のテーマ

Discourse Analysis of Popular Media

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

The following topics will be covered:

Approaching cultural and media studies; Signs and systems; Interactions of signs; Texts and textualities; Genre and intertextuality; Narrative; Discourse and the media. Examples from popular media, such as advertisements, manga, comics, anime, movies, and TV programmes will be used to explain concepts and methods.

<4年次>

The following topics will be covered:

Critical discourse analysis; Critical literacy; Ideology; Systems and strategies; Other approaches and other contexts. Examples from popular media, such as advertisements, manga, comics, anime, movies, and TV programmes will be used to explain concepts and methods.

(2) ゼミ論の有無

Yes.

(3) 評価方法

3rd Year: Presentations (30%); Class Participation (30%); Portfolio (40%).

4th Year: Presentations (20%); Class Participation (20%); Thesis (60%).

3. 使用テキスト

Tony Thwaites, Lloyd Davis & Warwick Mules. *Introducing Cultural and Media Studies: A Semiotic Approach*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.

4. 応募学生に望むこと

This seminar will be in English only.

5. 選考方法

If there are more than 20 applicants, the students will need to write a short report in English describing their interest in the seminar theme.

6. 演習入室までに学習してほしいこと

7. その他

Seminar events will be announced.

02 ヴァシリューク, スヴェトラーナ 准教授

1. 演習のテーマ

“Contemporary International Relations in Northeast Asia with the focus on Japanese Foreign Policy”

This seminar offers lectures, discussions, and readings reflecting on contemporary international relations in Northeast Asia (NEA), with a special focus on Japan’s foreign policy. Topics covered include: Japan’s participation in the military conflicts of the late 19th-early 20th centuries; Japan’s Pacific War (1937-1945); the US occupation of Japan; key issues in Japan’s postwar relations with major powers in the region; and the impact of the declining power of the US in regional and global affairs. In the course of two years, students will participate in field trips, attend public talks, and prepare reports and news analyses pertaining to the topics covered in class lectures.

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>: This seminar will begin with an overview of Japan’s history of foreign relations, providing students with the historical frameworks for explaining and understanding Japan’s contemporary international relations in NEA. The lectures, discussions, and readings will focus on a variety of core topics, such as: imperialism in NEA and Japan’s participation in major military conflicts of the 19th-early 20th centuries; Japan’s Pacific War (1937-1945); the US occupation of Japan; the core issues in Japan’s relations with key powers in the region; the rise of “the rest” and the emerging new world order.

<4年次>: The following topics will be covered: the impact of the declining power of the US in the regional and global perspectives; the origins of Japan’s major territorial disputes in NEA; history of the dispute negotiations and overview of the most feasible approaches to the settlement of Japan’s territorial disputes; the future prospects for Japan’s relations with the key powers in NEA. At the end of the 4th year, students will be required to write and present a research paper (thesis) covering one of Japan’s territorial disputes or any other controversial issue in Japan’s foreign policy in NEA.

(2) ゼミ論の有無: Yes

(3) 評価方法

3rd year:

News Portfolio 30%; Briefing paper 30%; Summaries 20%; General Class Participation 20%

4th year:

Thesis 60%; Presentations 20%; General Class Participation 20%

3. 使用テキスト

REQUIRED BOOKS:

(3B), (4A): Fareed Zakaria, “The Post-American World” (Release 2.0 Edition), 2011.

RECOMMENDED BOOKS:

(3A): James L. McClain “Japan: A Modern History,” W.W. Norton & Company: New York, 2002; Jeff Kingston, “Contemporary Japan,” Wiley-Blackwell, 2011.

(4B): Thomas J. Schoenbaum, “Peace in Northeast Asia,” Edward Elgar: Cheltenham, UK, 2008.

In addition, various handouts will be distributed in class as needed.

4. 応募学生に望むこと

- 1). The seminar sessions will be in English only. Students should have adequate English language skills to do well in this course.
- 2). Students are required to attend seminar sessions regularly. Any student, who is absent FIVE or more times, except absences due to the documented emergencies, will receive a failing grade.

5. 選考方法

The students will have to write a short report in English describing their interest in this seminar.

6. 演習入室までに学習してほしいこと

It is highly desirable that the students have completed basic courses in Political Science and/or International Relations prior to taking this seminar.

7. その他

Seminar events and additional information will be announced in class.

03 吳 在烜 教授

1. 演習のテーマ

この演習では、日本企業のものづくりやマーケティングを中心に学習します。日本企業のものづくりやマーケティングの特徴を、欧米のグローバル企業と比較して考察します。日本企業の国内事業だけではなく日本企業の海外展開についても、また小売業やサービス業などの業種も対象に入れて、事例研究を教材にして学習し、日本企業の活動の背景にある考え方や仕組み、グローバル経営などについての理解を深めることを目指します。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

3年次の春学期には、身近な事例を扱っているマーケティング関連理論書を読みます。3年次の秋学期には、幅広い業種のものづくりやマーケティングについての事例研究を取り上げて学習します。

<4年次>

4年次の春学期には、日本企業の海外事業展開に関する文献を読んで、日本企業のグローバル経営について学習し、また卒業論文の作成方法についても学びます。秋学期からは、卒業論文の作成に重点を置いて進めます。卒業論文の構想について順次発表しながら卒論の作成を進めていき、卒論の作成が終わった後に最終報告を行います。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> ゼミへの参画度(50%)、報告(50%)で行う。

<4年次> ゼミへの参画度および報告(50%)、卒業論文(50%)で行う。

3. 使用テキスト

文献は適宜紹介あるいは配布するが、3年春学期には、次の文献を使用する予定です。

石井淳蔵著『マーケティングを学ぶ』（ちくま新書）

4. 応募学生に望むこと

企業経営に関心をもち、積極的に議論に参加できる学生を望みます。

5. 選考方法

レポートあるいは面接

6. 演習入室までに学習してほしいこと

演習担当教員の学部科目「経営学A」「経営学B」を履修しておくことが望ましい。

7. その他

04 小笠原 泰 教授

1. 演習のテーマ

I C T（情報通信技術）が牽引する技術革新と融合しながら、加速化する不可逆なグローバル化の中では、企業・市場と個人の力が高まり、その一方で主権国家の力は必然的に低下していきます。つまり、かつてのように、国境という高い壁を前提に国家と企業と国民（個人）のインレストは当然一致するという三位一体的な考えは急速に弱まりつつあります。もはや、国家は絶対的な存在ではなく、グローバル化する世界の中でのプレーヤーの一つであるということです。このような急速な環境変化の中であって、国家としての日本は、どのように生き残りを模索することになるのかについての考察を、米国、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンなどの国々を分析することで深め、具体的にどのような選択肢が日本という国家にありうるのかについて議論をしていきます。それを踏まえて、ゼミ生が各自の将来をどのように展望するかについての議論も深めたいと思います。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

- ★ グローバル化の進展と I C T の発展による環境の変化を包括的に捉え、グローバル化とはなにかについての認識を深めます。
- ★ 米国、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンなどの国々が、グローバル化に対してどのように対応しているかの分析を行います。

<4年次>

- ★ 日本が国家としてとりうるグローバル化への対応の選択肢についての議論を深めます。
- ★ 上記を踏まえて、日本の取りうるグローバル化適応の方向性について、グループでの結論をまとめて発表します。

(2) ゼミ論の有無

なし（代わりに卒業発表を行います）

※ 卒業発表は、グループを基本としますが、個人でも可。

※ ゼミ論を希望する人は、相談してください。

(3) 評価方法

<3年次> 春学期・秋学期：定期発表（40%）議論への参加・貢献度（30%）
各期終了レポート（30%）

<4年次> 春学期：定期発表（40%）、議論への参加・貢献度（30%）、
春学期終了レポート（30%）

秋学期：定期発表（30%）卒業発表（70%）

※ ゼミであるので、出席は評価の前提とします。

3. 使用テキスト

必要に応じて、適宜指示します。

4. 応募学生に望むこと

加速するグローバル化の中で、そのダイナミックな変化に興味を持ち、知的好奇心が旺盛で、積極的にゼミに参加できる地頭に自信がある学生を望みます。無断欠席、遅刻は厳禁です。

5. 選考方法

筆記試験と面接（詳細は個別ガイダンスの際に指示します）

6. 演習入室までに学習してほしいこと

日常生活における I C T（情報通信技術）の急速な変化についての感度を高めてください。そして、ニュースやマスコミで多用される文化とは、一体何を意味しているのかについて考えてみてください。

7. その他

夏休みには2泊3日のゼミ合宿（場所は適宜）を行う予定です。

05 金 ゼンマ 専任講師

1. 演習のテーマ

グローバル化とアジア太平洋の政治経済

アジア太平洋における政治経済を勉強するゼミです。本ゼミでは、二国間自由貿易協定(FTA)、ASEAN+3、環太平洋経済連携協定(TPP)など重層的に進展するアジア太平洋の地域統合への動向を踏まえ、リージョナリズムの現状と今後の課題について分析する視点を養います。さらにそうした視点を踏まえて、東アジアを含む広義のアジア太平洋における国際関係の変化やグローバル化への各国の政策的対応の相違と共通性について、論点の理解を深めることを目的とします。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

毎回、担当者2名が指定文献の担当内容についてレジュメを作成し、発表します。コメントータ2名は、文献に関連したコメントやディスカッションのための質問を提供します。報告レジュメは、報告の三日前までにはゼミのメーリングリストに送り、報告当日にディスカッションを全員参加で行えるようにします。報告とコメント、ディスカッションの使用言語は、英語でも日本語でもかまいません。

<4年次>

3年次で得た知識を踏まえ、各自の興味のあるテーマについて調査・研究を行い、卒業論文を作成します。二か月に一度の割合で卒論について発表し、ゼミでのフィードバックを通じて論文を修正・発展させていきます。卒論は、英語でも日本語でもかまいません。

(2) ゼミ論の有無

研究発表とゼミでの議論を踏まえて、ゼミ論を作成し提出していただきます。

(3) 評価方法

<3年次> 平常点(40%)、プレゼンテーション(40%)、レポート(20%)

<4年次> 平常点(20%)、プレゼンテーション(20%)、論文(60%)

3. 使用テキスト

適宜指示します(英語と日本語の文献)。

4. 応募学生に望むこと

いま、アジア太平洋の政治経済において何が問題となっているのか、知的好奇心を持って積極的にゼミに参加できる学生を望みます。

5. 選考方法

小論文(研究テーマ・応募理由)と面接(詳細は個別ガイダンスの際に指示します。)

6. 演習入室までに学習してほしいこと

アジア太平洋の国々の政治経済情勢に興味を持ち、日々の国際ニュースに接しておくことを期待します。

7. その他

本ゼミでは、実践的な視点を養うための、フィールドワークや合宿を行う予定です。韓国の高麗大学・西江大学・延世大学との合同ゼミがあるなどイベントが豊富で、頑張れば頑張るほど得るものが大きくなるゼミです。

06 小林 明 准教授

1. 演習のテーマ

国際教育交流の理解と実践

このゼミでは「国際教育交流は国際平和実現の礎」と位置付けて、国際教育の概念を理解した上で、学校教育における海外留学や交流プログラムなど国際教育交流の実態を調査し、国際教育交流の果たす役割や効果を学ぶとともに国家・地域間および文化間の平和的な共存を推進する理想的な国際教育プログラムを模索します。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

ユネスコの「国際教育の勧告」について学び、日本の取り組みを調べることで国際教育の理念と実際について理解を深めます。特に国内の中高等教育機関における国際教育交流の具体的な取り組み(留学プログラムやカリキュラムとその効果)について調査します。

<4年次>

海外大学の国際教育交流プログラムの理念と実際について調査し、日本の調査結果と比較しながら問題を考察し、高等教育における国際教育交流のあり方を構想します。

(2) ゼミ論の有無

無し(ただし E-book 等、何らかの形で成果を発表する。)

(3) 評価方法

<3年次> 平常点(40%)、発表(30%)、レポート(30%)で行う。

<4年次> 平常点(30%)、発表(30%)、レポート(40%)で行う。

3. 使用テキスト

『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』

横田雅弘・小林明編 発行：学文社

4. 応募学生に望むこと

国際教育交流および異文化感性の向上に興味を持ち、積極的にゼミに参加できること。

無断欠席、遅刻は厳禁で、海外研修費(約15万)を自力で捻出する気力がある者。

5. 選考方法

筆記試験と面接(詳細は個別ガイダンスの際に指示します。)

6. 演習入室までに学習してほしいこと

学部開設科目の「海外留学入門 AB」「国際教育交流論 AB」を履修しておくことが望ましい。

7. その他

夏休みに2泊3日のゼミ合宿、4年の夏休みに海外大学で実地研修を行う予定です。

07 小森 和子 准教授

1. 演習のテーマ

第二言語としての日本語の語彙習得

日本語では「薬を飲む」と言うのに、中国語では「吃药(食べる)」と言い、英語では「take medicine」と言います。＜薬を体内に入れる＞という同じ現象を表すのに、使う動詞は言語によって異なることがあります。また、それを知らずに、自分の母語を文字通りに第二言語に翻訳すると、不自然になってしまうこともあります。そこで、本演習では、日本語と他の言語を比較・対照し、それぞれの言語の語の意味や用法の異同について考察しながら、日本語学習者にとって、日本語のどのような点が習得が難しいのか、また、どのような点は習得が容易なのかについて、考えていきます。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

言語学、認知言語学、第二言語習得、日本語教育などの複数の理論を、統合的・学際的に学び、日本語学習者がどのような間違いを起こすのか、それはなぜか、考えます。

また、秋学期は、受講生全員で一つのテーマを設定し、留学生を対象に調査を行います。

<4年次>

調査研究方法論（コーパス、統計、テストング）を学んだ後、受講生が各自で、あるいは、グループで研究テーマを設定し、研究計画を立て、データを取って分析します。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

出席と議論への参加（20%）、発表（30%）、レポート（3年次）・論文（4年次）（50%）。

3. 使用テキスト

榎山洋介（2009）『日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学』研究社他、授業時に指定。

4. 応募学生に望むこと

言語が好きな人、言語学を基礎から学びたい人、将来海外で日本語を教えてみたい人、日本語と英語・中国語・韓国語を比較してみたい人、大歓迎です。

5. 選考方法

筆記試験と面接

6. 演習入室までに学習してほしいこと

ゼミ入室までに学部開設科目の「日本語教育学」はぜひ履修しておいてください。

7. その他

08 佐藤 郁 専任講師

1. 演習のテーマ

世界と日本のツーリズム

本演習の目的は、身近な観光という現象を通じて、世界の中の日本、日本から見た世界について理解を深め、同時に、様々な立場や範囲から物事をみる視点を養うことです。これまでは観光客という立場が多かったかもしれませんが、本演習では観光を通じて様々な異なる人や組織、地域の立場やスケールからものごとを多角的に把握し理解する力を身につけます。そして、様々な立場や利害関係者が関わる観光のもつ「力」とは何かについて皆で考えていきます。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

- 前半は、観光統計や政策文書を参考にしながら、世界観光機関(UNWTO)や日本政府・企業等が行うプロジェクトやキャンペーン、訪日外国人向けのツアーや施策、観光地や観光業者が制作するウェブサイトやツアーパンフレット等を題材に、様々な立場での観光の課題について、ディスカッションを行います。
- 後半からは、前半の議論を踏まえて、小グループでデスティネーションをひとつ選択し、観光プロジェクトやツアーの企画を行い、最後にグループごとに発表をします。グループワークは、実現性よりも、観光の「力」を最大限に引き出すための発想やイマジネーション、課題のクリエイティブな解決方法という観点を重視します。プロジェクトやツアーの企画・制作を通じて、立場やスケール、目的、ターゲットによって内容がどう変わるのかについて具体的に考えながら、観光のもつ「力」がどのように最大限に生かされるのかのかについて議論します。
- 最終レポートは、自身の参加したグループワークの成果と課題を、各個人で評価したものを提出してもらいます。(グループメンバーや作業に対する評価ではありません。課題を終えて、自分のグループの企画について、まだ議論の余地がある部分と思う部分や、素晴らしいと思う点などを個人で評価してください。詳しくは授業内で説明します。)

<4年次>

観光に関するテーマを各自で設定し、最後にゼミ論をまとめる。基本は個別チュートリアルとし、全体で中間発表および最終発表会を実施します。

(2) ゼミ論の有無

有

(3) 評価方法

3年次：平常点(40%)、グループ発表及び議論への貢献度(30%)、最終レポート(30%)によって総合的に評価する。

4年次：平常点(10%)、発表(30%)、論文(60%)によって総合的に評価する。

3. 使用テキスト

特に指定しない。その都度必要なものを配布する。

4. 応募学生に望むこと

地理の基礎的な知識があることが望ましい。

5. 選考方法

筆記試験及び面接。2年次前期までの成績も参考にする。
(詳細は個別ガイダンスで説明します)

6. 演習入室までに学習してほしいこと

「ツーリズム・マネジメントAB」を履修しておくことが望ましい。

7. その他

受講生の数や要望、理解度を考慮し、若干内容を変更する場合があります(授業時間外で地域視察などを行う場合もあります)。

09 鈴木 賢志 教授

1. 演習のテーマ

北欧の社会システムと社会心理 - 日本との比較

スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランドといった北欧諸国は福祉サービスの水準が高く、しかしなおかつ高い経済水準を維持している。また男女平等、環境問題への取り組み、IT技術の発達などにおいても、しばしば引き合いに出されている。最近では、IKEAやH&Mといった多国籍企業の活躍でも話題に上がっている。本ゼミでは、こうした北欧諸国の様々な側面の理解を深めつつ、日本の社会システムと比較分析することで、日本の将来に対する示唆を探る。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

春学期は、北欧諸国と日本を自分が興味のあるテーマについて比較し、その成果を発表する。

秋学期は、北欧や比較社会学に関わる論文の輪読を行う。

<4年次>

春学期は、国際比較データを題材とした分析手法の習得と、各自が興味を持ったテーマで北欧諸国と日本、または北欧諸国と日本を含む多国間の比較分析の計画作成を行う。

秋学期は、本格的なプレゼンテーションの作成に取り組む。優秀なものについては(社)スウェーデン社会研究所が主催するセミナーで発表することも予定している。

(2) ゼミ論の有無

4年次の春学期から秋学期にかけての成果(プレゼンテーション)を「ゼミ論」とする。

(3) 評価方法

各期の発表、レポート、および授業への取り組みを考慮に入れて評価する。

3. 使用テキスト

特に指定しない。

4. 応募学生に望むこと

ゼミの活動は、スウェーデン社会研究所やスウェーデンの大学との連携など、様々な広がりをもって行うので、座学に限らず、何事にも積極的に取り組んでくださる方の参加を望む。

5. 選考方法

小論文(応募理由)および、2年次春学期までの成績に基づいて選考する。場合によっては面接を実施する。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

鈴木木の担当科目(日本社会システム論、海外日本研究事情)のいずれかを履修している方が望ましい。

7. その他

10 瀬川 裕司 教授

1. 演習のテーマ

高度な批評能力を身につける

本を読んだあと、あるいは映画を観たあとに、「面白かった」「つまらなかった」といったカタコトの〈感想〉ではなく、自分の意見を論理的に展開できる大学生は少ない。〈コメント力〉あるいは〈批評力〉は社会人になってからも重要なものだが、わが国の学校教育では、この能力の養成は軽視されてきた。このゼミでは、小説、演劇、映画、絵画、音楽などあらゆる対象に的確な言葉で批評をおこなえる能力を養うことを目標とする。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

毎回の授業に対してひとつの映画作品、小説などを指定する。参加者は、授業日までにその作品に接し、資料を見るなどして批評文を用意する。授業時には、参加者はたがいの批評を比較して意見を交換し、分析能力の向上をめざす。参加者の希望に応じて、演劇や音楽なども考察の対象とする。映画がテーマとなる場合は、たとえば〈ミュージカル映画〉、〈タランティーノの監督作〉等のテーマを決めて何本かの作品を続けて研究したい。

<4年次>

各参加者が、中心に据えて研究したい映画作家・小説家・ジャンル・アーティスト等のテーマを決めてゼミに臨む。毎週の授業では、ひとりもしくはふたりが自身のテーマに関連する批評文・レポートを提示し、口頭発表をおこなったのち、全員でその内容について意見を交換する。必要な場合には、授業時間中に関連作品をDVD等で鑑賞する。最終的に、そういった発表をまとめるかたちで年度末にゼミ論が提出されることが望ましい。

(2) ゼミ論の有無

参加者は原則として学年末にゼミ論を提出してほしいが、ゼミ論執筆を希望しない場合は、レポート提出、口頭発表等で代用できる。

(3) 評価方法

<3年次> 毎回授業時の批評文および発表で評価する。

<4年次> 毎回授業時の発表（65%）、学期末のレポートもしくはゼミ論（35%）で評価する。

3. 使用テキスト

授業時に指示する。

4. 応募学生に望むこと

映画や文学、演劇など国内外の文化全般に関心があり、文章を書くのが好きで、積極的に意見を述べられる学生、もしくはそのようになりたいと考える学生が望ましい。

5. 選考方法

必要な場合には、アンケートなどを実施する場合もある。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

蓮實重彦氏の映画関係の著作を演習開始前に2冊程度読んでおくことが望ましい。

7. その他

希望するゼミ生には、「ドイツ映画祭」（開催されない場合もある）の運営にボランティア・スタッフとして関わってもらいたい。

11 田中 牧郎 教授

1. 演習のテーマ

日本語の歴史と現在

日本文化の基本であり、日本社会がよって立っている「日本語」を、歴史的視点を踏まえて研究します。3年次では、どのような歴史を経て今の日本語の姿になってきたかを研究し、4年次では、現代社会で日本語がどのような役割を果たし、どのような問題をかかえているかを研究します。文学作品などを用いて、古代から現代までの日本語の分析を行うほか、生きた言葉の研究のためにフィールド調査などにも出かけます。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

日本語は、原始時代に日本列島に住み着いた民族の話し言葉として始まり、漢文と出会って書き言葉を持ったことで、平安時代までに言語文化を花開かせ、世界に誇る『源氏物語』を生み出しました。明治時代には西洋語の翻訳や、文体改革を経て、近代的な言語に変貌しました。この壮大な日本語の歴史を、文献調査（古典を読む）、コーパス調査（データベースを調べる）、フィールド調査（古典芸能や方言を聴く）を通して研究します。

<4年次>

現在の日本語を、様々な角度から研究します。例えば、作家の言葉や政治家の言葉は、どのようにして読み手や聞き手の心に届く（届かない）のか、報道や広報の言葉は、不特定多数の大衆に伝わるように、どのように工夫されている（工夫が足りない）のか、具体的な作品や事例を取り上げて調査・分析していきます。そのような研究を通して、日本語の構造や歴史についての高い見識を身に付けます。

(2) ゼミ論の有無

ゼミ論は任意です。調査を踏まえたレポートを毎学期書いてもらいます。

(3) 評価方法

3年次、4年次とも、ゼミ活動への参加状況とレポートを総合して評価します。

3. 使用テキスト

テキストと参考図書などは、その都度指示します。

4. 応募学生に望むこと

よく調べ、よく考えることを求めます。

5. 選考方法

面接によって選考します。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

古典に親しむ、外国語と日本語を比べる、ニュースの言葉に関心を持つ、言葉遣いに敏感になることなどで、日本語研究への動機づけを高めておいてください。

7. その他

夏休みには、国内で合宿を行う予定です。

12 旦 敬介 教授

1. 演習のテーマ

ラテンアメリカ文化研究

他の国の文化を知るのは何のためか。それは基本的には自分を変えるためだと考える。自分が変わることによって、自分の周りの社会を変え、ひいては世界全体を変えていく。このゼミは、ラテンアメリカとカリブ海の国と地域に何か世界を変えるヒントがあるのではないかと予感している人たちが、その文学や音楽などの芸術文化、あるいは歴史や社会、生活文化の成り立ちなど、様々な領域について調査研究する場である。日本を含む世界中の「辺境の民」に共通する生の体験とはどのようなものなのか考える機会としてこのゼミを利用してほしい。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3 年次>

春学期は受講者全員がすでにもっている知識を共有する（教えあう）期間とする。秋学期は各人が設定した主題について調査し、発表する期間となる。春秋を通じて、全員で課題図書を読んで発表し、論じあう活動を続ける。そのために本の読み方・発表の仕方を指導する。本を読む、音楽を聞く、映画を見る、調べものをして発表する。秋学期からは全員の共同作業でなんらかのプロジェクトを企画・運営するのを課題とする。

<4 年次>

12 月末までにゼミ修了論文を書くことを目標とする。大学での勉強のまとめとして、形式の整った論文を書く。ただし、その他の形式の制作（文学・芸術・社会活動など）をもって代替することも認める。授業時間内には定期的に経過報告と論文指導をする。また、課題図書等について発表し、論じあう活動を続ける。

(2) ゼミ修了論文の有無

あり。上記参照。

(3) 評価方法

<3 年次> 授業時間内の活動（40%）、読書などの課題（35%）、学期末の課題およびプロジェクト活動（25%）をおおむね上記の比率で評価する。

<4 年次> 授業時間内の活動（40%）、学期末（学年末）の課題（60%）

3. 使用テキスト

キンケイド『小さな場所』、ヴィアナ『ミステリー・オブ・サンバ』、コンデ『生命の樹』、ラヴレイス『ドラゴンは踊らない』、ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』などを予定。

4. 応募学生に望むこと

『ラテンアメリカの歴史と文化』未履修者は 2016 年度にかならず履修すること。課題の本だけでなく、関連する領域の本を自分で捜して読むこと。主題に関連した表現に触れる機会を自発的に作ること。英語の資料を読む英語力は必要。ゼミ内で使用する言語のレベルを日常生活や友人間のものとは区別して、知的な大人として話をする。3 年次ゼミは 5 限に設定するが、6 限途中まで延びる場合があるので、そこに常に予定が入っている人には不向き。参加者にはなるべく在学中にラテンアメリカの国を個人旅行で訪問する機会を作ってほしい。そのための情報提供をする。文学作品を読んでほしい。米国以外の映画を見てほしい。ゼミ参加決定から新年度開始までの間に課題を課す場合がある。世界各地の中心から外れた場所の文化に対する好奇心が旺盛な人を求める。

5. 選考方法

面接と筆記試験による。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

フランス革命以後の世界の歴史の基本的知識は必要。世界の国の名前と位置ぐらいはわかる基礎的な地理の知識がないのは困る。ラテンアメリカ人の表現者に注意して積極的に見聞を広めること。

7. その他

担当教員はラテンアメリカのとくにスペイン語圏の現代文学の専門家だが、現在の主な関心は、ブラジルと西アフリカの間の文化的つながりの歴史にある。したがって、とくにブラジルのアフロ的文化についての言及が多くなる。English-speaking students are welcome.

13 張 競 教授

1. 演習のテーマ

比較文学・比較文化特別研究

文学や文化の受容および変容、文化衝突などについて演習を行う授業である。ゼミ生が自ら課題を見つけ、資料調査や社会調査などを行う上、その結果をゼミで発表する。ゼミでの議論を通して理解を深め、それを踏まえて最終報告をまとめる。そうした一連の作業を通して、基礎的な研究に必要な方法を身につける。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

この演習は、将来卒業論文や卒業発表の作成を視野に入れ、比較文学比較文化に関する問題について研究を行う授業である。最初の一、二回ではテーマの設定、文献調査、資料収集、現場調査、データの処理、口頭発表、論文の執筆の時期や基礎的な作業の方法および研究の進め方について勉強する。

スケジュールは基本的にゼミ生と議論の上で決める。まず、ゼミ生全員が共通するテーマについて役割を分担し、調査と発表を行う。その後、ゼミ参加者は各自に選定されたテーマについて、文献調査、資料収集あるいはフィールドワークをする。その結果について、中間報告を行う。それぞれの報告について、ディスカッションを行い、それを踏まえて調査研究を改善していく。

最後にゼミ参加者は自分の担当する部分について発表し、ディスカッションを行う。その間、自分が将来、卒論で何を取り上げたいか、考えておく。

<4年次>

この演習は3年次の継続で、ゼミ参加者は自分の設定したテーマについて研究を行う授業である。基本的な進め方は3年次と変わらないが、グループ作業の代わりに、個人を中心とする作業になる。春学期には中間発表が求められ、秋学期のはじめには原則として論文か卒業発表の走行の提出が求められる。

(2) ゼミ論の有無

あり

(3) 評価方法

<3年次>平常点50%、発表50%

<4年次>平常点50%、発表および論文50%

3. 使用テキスト

必要ときに随時に指示

4. 応募学生に望むこと

積極的に授業参加すること

5. 選考方法

筆記試験と面接

6. 演習入室までに学習してほしいこと。

特になし。

7. その他

小人数が望ましい。

14 長尾 進 教授

1. 演習のテーマ

スポーツ・武道と「国際」

2020年に、夏季オリンピック・パラリンピックが東京で56年ぶりに開催されます。世界がいろいろな課題を抱えるなかで、日本や東京がこの五輪とどう向き合うかが注目されていますし、そのあり方を考えることは、ゼミとしての大きなテーマです。また、多くの日本文化がそうであるように、武道も「国際」との関わりのなかで長い年月を経て作り上げられてきました。武道をめぐる国際的要素と日本的固有性について考えることも、ゼミのもう一つの大きなテーマです。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

スポーツや武道をめぐる国際的な諸事象、すなわちオリンピック、ワールドワイドなスポーツビジネス、スポーツと国際政治、武道の国際化、国際的視点から見た日本武道や武士道の「固有性・普遍性」などのうち、各人の関心のあるテーマを選び、先行研究をチェックし、資料を集めて整理・分析し、学期ごとに中間発表やレポート提出を行います。

<4年次>

4年春学期は、3年次に提出した年度末レポートをベースに、さらに補足の資料収集・調査を行い、発表します。夏季休暇中に最終的資料収集を行い、秋学期は論文としてまとめる作業に入り、12月末までに提出します。1月の授業は、3年生も交えてのゼミ論発表会&卒業生送迎会となります。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次>発表(40%)、レポート(40%)、意欲(20%)で行います。

<4年次>発表(30%)、レポート・論文(60%)、意欲(10%)で行います。

3. 使用テキスト

テーマに関わりのある資料や書籍、URLなどを、そのつど紹介します。

4. 応募学生に望むこと

ゼミだから出席だけしていれば、という考え方ではなく、授業の事前・事後においても各人がアクティブな学修をすることを望みます。

5. 選考方法

募集定員をめどにスポーツ・武道に関する簡単な筆記試験と面接で選考します。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

武道・武士道を研修対象とする人は、「武道文化論」A・Bを履修していることが望ましいですが、入室の条件ではありません。

7. その他

夏季、冬季、または春季の休暇中にゼミ旅行合宿(1泊2日程度)を行います。研修先は、皆さんと話し合って選定します。

15 野村 清 教授

1. 演習のテーマ

国際社会における日本のアイデンティティ研究

広報、広告という考え方で日本の対外発信を考えたとき、日本はどのような情報発信をすべきだろうかということがテーマの原点である。日本は世界からどう思われているのか。

「日本の顔」とは何か。日本は世界から真に「価値ある存在」として認められているのか。国内外における日本の実像（および認識）を分析し、日本のアイデンティティについての課題を設定した後、日本が発信すべき「国際社会に通用する普遍的価値」と「日本のイメージ形成」の具体策について広く社会に提言する内容を作成する。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

春学期(3A)「外からみた日本」－海外メディア・雑誌・書籍・論文等に現れた日本に対する認識の変遷および現在の日本像を明らかにする。

秋学期(3B)「内からみた日本」－史的資産としての日本の特質および自らによる日本論および国際化論の分析を通じて日本自身が価値を置いているアイデンティティを探る。

(主として文献・記事分析による研究。半期毎に発表・レポート。)

<4年次>

春学期(4A)「国際社会へ発信された日本のアイデンティティ」－現在の日本像を形成する主要因となった活動・発信を明確化し、今後の国際発信の具体的分野（社会・文化両面）の有用性を分析する。

秋学期(4B)「国際社会へ発信すべき日本のアイデンティティ提言」－理念、グローバル・コミュニケーションの具体的施策、内なる改革についての提言。

(年間を通じて理論研究・論文作成。春学期末に中間段階論文提出と発表を行う。)

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> 平常点(40%)、発表(30%)、レポート(30%)で行う。

<4年次> 平常点(20%)、発表(20%)、論文(60%)で総合的に評価。

3. 使用テキスト

『What is Japan?』天谷直弘・電通総研編著 PHP 研究所 1990年(絶版につき輪読)

「ボーダーレス時代の広告を考える～グローバル・コミュニケーションの新たな枠組みを求めて～」野村清著 日本広告学会「広告科学」第25集 1992年(絶版につき輪読)

4. 応募学生に望むこと

テーマへの興味関心の強さ、意欲的に自分で考えてみようとする熱意を重視。

5. 選考方法

筆記試験と面接(詳細は個別ガイダンスの際に説明します。)準備は不要。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

広告産業論ABを履修していることが望ましい。入室後、3年次に履修しても良い。

7. その他

ゼミ合宿はメンバーと相談して行なうが、3年次夏に実施する予定。

16 萩原 健 Ken Hagiwara 准教授

【注意 Notice】基本的に日本語で行いますが、英語の使用も歓迎します。Basically, this seminar will be held in Japanese, but English is highly welcome.

【Special note for German speakers】Während die Diskussionssprachen Japanisch und Englisch sind, ist es auch möglich, Arbeiten auf Deutsch zu schreiben.

1. 演習のテーマ Theme

“Performances” in Daily Life and Art Scenes

“I am sure I gave a good performance during the interview”. - Haven’t you heard such expression? But what is a “performance”? Doesn’t it depend on audiences, situations, countries or cultural contexts, whether a performance is good or bad? On the other hand, “performance” can be a genre of art. After watching the performance, writers report saying for example: “This performance was so bad it can be ignored.” “Performances” in daily life and art scenes - The one in daily life can serve as a reference when thinking about the one in art scenes and vice versa. This is the core concept of this seminar. Each student is expected to research a theme related to the term “performance.”

2. 授業内容 Activities

(1) 授業の進め方 Proceeding

Each student is required to write a statement based on her/his own interest and then write a thesis. The core activities in each session are reporting about working processes and exchanging opinions among the students.

<3年次 3rd Year>

[Spring semester] After some introductory activities in the first sessions, each member introduces a book or an article that interests her/him. Together with this book or article, 20 sources should be listed with comments. This source list with comments is the term paper (A) which has to be submitted at the end of the semester.

[Fall semester] The students modify the source list, select quotes from the 20 sources (They should be used in the thesis) and write the statement (This will be the conclusion of the thesis). The modified source list with comments, quotes and the statement will be the term paper (B) which has to be submitted at the end of the semester.

<4年次 4th Year>

[Spring semester] The members work on the structure of the thesis based on the term paper (B). A table of contents should be written including descriptions on the content of each chapter. This table of contents is the term paper (C) which has to be submitted at the end of the semester. After submission of term paper (C), each student starts writing the thesis.

[Fall semester] Each student introduces a part of her/his thesis. Its content and next working steps will be discussed in class.

(2) ゼミ論の有無 Thesis

Required

(3) 評価方法 Evaluation

<3rd Year> Contributions made during each session (30%), presentations (30%), term papers (40%)

<4th Year> Spring semester: same as during the 3rd year; Fall semester: Contributions during each session (20%), presentations (20%), thesis (60%)

3. 使用テキスト Textbook

Depending on each student’s research topic, references will be recommended in class.

4. 応募学生に望むこと Requirements

Active participation during class and doing homework are basic requirements. Being absent or being late for class without any prior notification will have an effect on students’ grades.

5. 選考方法 Screening

Submitting a short report (approx. 1000 letters in Japanese or 500 words in English) and taking an interview. The report must be sent by email to hagi@meiji.ac.jp until two days before the day of the interview. The topic for the short report is: The relation between (a) the term “performance”, (b) your current interests and (c) your future vision after graduation.

6. 演習入室までに学習してほしいこと Required activity that will have been done before the start of the seminar

Please read at least three books related to the topic “performance”. Every time you finish one book, please report about it (author, title, year of publication, publisher, content and your own opinion) by email (hagi@meiji.ac.jp).

7. その他 Others

A three-days-seminar will be held during the summer vacation in one of the seminar houses of Meiji University. Students will also occasionally watch plays during the semester.

17 長谷川 文雄 教授

1. 演習のテーマ

ICTの発展、とりわけAIの急速な進歩により、既存の産業は大きな影響を受け始めています。これらにより近い将来ホワイトカラーの5割が不要になるという予測もあります。やがて消滅する業種、新たに勃興をする業種などにより、必要とされる人材も変わってきます。少子高齢化、グローバル化など、日本の内外の状況も大きく変わっていきませんが、本ゼミではICTを1つの切り口にして、メディア産業やコンテンツ産業を中心に、これからの日本の産業を展望してみます。これからどのような状況になるのか、どのような影響が出てくるのか、いかなる対応が必要なのかなど、企画提案を含めて多面的に考察していきます。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

春学期は共通テーマによるグループ討議および輪読を行う。

秋学期はグループ討議及び輪読に加え、各人の問題意識を卒論テーマに具体化する準備と絞り込みを行う。

<4年次>

共通研究テーマによるグループ討議と発表。卒論テーマの個別指導。卒論は今までの学習成果の集大成になるので、進捗状況を発表しあい、議論をしながら内容を深めていきます。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> 平常点(40%)、発表(30%)、レポート(30%)で行う。

<4年次> 平常点(20%)、発表(20%)、論文(60%)で行う

3. 使用テキスト

時機に即したテキストを選定。

4. 応募学生に望むこと

私たちはどうしても直近の出来事に目を奪われがちですが、中長期の視点で物事を考えるところが非常に大切です。急速に変わるとしている日本の社会のこれからの関心のある諸君は大いに学んで欲しい。

5. 選考方法

研究計画書に基づく面談

6. 演習入室までに学習してほしいこと

特にありませんが、メディアリテラシーに関する基礎的な知識の習得があれば、望ましい。

7. その他

夏期休暇中にゼミ合宿の他、時期に応じたゼミ生懇親会を開催

18 姫野 伴子 教授

1. 演習のテーマ

日本語文法研究

外国語として日本語を学ぶ人にとって、日本語の文法や運用のしくみの何が難しく、それはどうしてなのか考えます。さらに、実際に使用されている日本語初級教科書の特徴を調べて、導入・練習方法や副教材について考えたり、教材を試作したりします。

言語現象の背後にある一般原則を見つけ出す力を身に付け、世界の言葉と日本語をよく知ることで、日本語を的確に運用・説明・教育できる人を目指します。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

日本語文法を考えるための基礎的枠組みを学んだ後、何種類かの日本語初級教科書を取り上げて、各参加者が担当する1冊を決め、各教科書の特徴を調べます。その教科書を用いて教えるとしたら、どのように導入・練習すれば効果的か、どのような副教材が必要かなどについても考えます。

<4年次>

日本語文法・日本語教育にかかわる問題の中から各自が選んだテーマについて、先行文献の調査、データの収集・分析・考察を行い、最終的には論文にまとめていきます。授業では、各自が研究の進展を順番に報告し、全員で意見交換します。言語現象の背後にどのような言葉の一般原則があるのかを探求していきます。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> 出席と議論への参加 (30%)、発表 (30%)、レポート (40%)。

<4年次> 出席と議論への参加 (20%)、発表 (20%)、論文 (60%)。

3. 使用テキスト

授業時に指示します。

4. 応募学生に望むこと

日本語文法を考えること、外国語として日本語を教えることに関心を持ち、積極的に議論に参加する学生、日々自分が使う日本語に注意を払い、そのしくみを発見しようとする学生を望みます。

5. 選考方法

筆記試験と面接（詳細は個別ガイダンスの際に指示します。）

6. 演習入室までに学習してほしいこと

学部開設科目の「日本語教育学（文法）」「日本語教育学（語彙）」「日本語教育学（音声）」「日本語学」を履修しておくことが望ましい（同時履修も可）。

7. その他

- (1) 3・4年生合同でゼミ合宿を行う予定です。時期と期間は相談の上、決定します。
- (2) 在外研究期間となる2016年度春学期は、小森先生のゼミに入れていただきます。

19 廣森 友人 准教授

1. 演習のテーマ

第二言語習得の心理学：外国語の学習を科学する

外国語学習の成功や失敗に影響を与える学習者要因（動機づけ、学習方法、学習スタイルなど）について研究します。自らの学習経験を振り返りながら、より効果的な外国語学習や外国語指導の在り方について、具体的な考えを持てるようになることを目標とします。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

4年次のゼミ論（卒論）執筆を見据えて、演習を進める上での基礎となる3つの力（①英語力、②研究力、③プレゼン力）を強化します。「①英語力」は英語文献の読解、英語でのプレゼンに加え、英語試験の受験を通じて、1-2年次に身につけた英語の基礎力をさらに進化させます。「②研究力」は興味・関心のあるトピックを研究課題として具体化させ、調査計画の立案・実行・評価といったプロセスをグループ単位で経験することにより、研究の基礎力を身につけます。「③プレゼン力」は毎授業で行われる3分プレゼン、事前に分担した文献内容のプレゼン、ゼミナール大会への参加などにより、伝えたいことを簡潔に分かりやすく表現できる能力を身につけます。

<4年次>

3年次に学んだことを踏まえ、各自が個人単位で興味・関心のあるトピックについてゼミ論（卒論）を執筆します。授業では、定期的に各自の進捗状況を報告しあい、他のゼミ生や教員からのフィードバックを受けます。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

出席・議論への参加状況（25%）、発表（25%）、レポート（3年次）or ゼミ論（4年次）（50%）

3. 使用テキスト

履修者の興味・関心を踏まえて決定します。

4. 応募学生に望むこと

- ・研究室のウェブサイト（<http://hiromori-lab.com>）を事前に確認し、自分がやりたいことと関連があるかどうかを十分に見極めた上で応募してください。
- ・私の専門は動機づけ（やる気）です。やる気は伝染します。やる気に満ちたゼミ生を歓迎・応援します。また、（英語を含めた）勉強好きな学生、グループでの作業が好きな学生、自分に自信をつけたい学生も歓迎・応援します。

5. 選考方法

小論文（テーマは「このゼミを希望する理由、このゼミで勉強したいこと」と面接。入室試験では、志望動機書に基づいた日本語、英語による面接を行います。詳細は、個別ガイダンスの際に指示します。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

演習担当教員の学部科目「心理と言語 A・B」（ならびに関連科目「英語学」「応用言語学」「言語と文化」など）を履修しておいてほしい（あるいは、ゼミと同時に履修してほしい）と考えています。

7. その他

- ・履修者には各々の希望・個性等に合った役割（例：ゼミ長、合宿係、レク係）を担ってもらいます。
- ・長期休業中にはゼミ合宿を行う予定です。その他、BBQ、誕生会、紅葉を愛でる会など、学生の自主性と教員の思いつきによって各種行事・イベントがあります。
- ・廣森ゼミのモットーは、「ゼミは部活!」。



20 眞嶋 亜有 Ayu Majima 専任講師

1. 演習のテーマ

「グローバル人材」とは何でしょうか？「国際日本」とはどのような意味を持つのでしょうか？日本や日本人の「グローバル化」を考えることは多角的視点から「日本とはなにか」「日本人とはなにか」を考えることです。本ゼミでは、日本文化の世界発信や異文化受容のビジネスモデル、ジェンダーや家族、身体文化や生活文化、また個性や多様性をめぐる様々な社会現象や文化現象など、私たちの身近な視点から、「日本とのグローバル化」の諸相を比較文化を通じて考えていくことで、グローバル化社会に生きていく力となる複眼的視座を養っていきます。個と多様性が重視されていく現代、また2020年東京オリンピックを控え、超少子高齢化を迎え、グローバル化が加速していく現代、国籍、人種、民族を問わず互いの感性を尊重しながら、グローバル化社会で私たちが世界市民としてできることはなにか、日本が世界に貢献しうる可能性とはなにか、そしてその豊かさとは如何なるものかを共に学び、考えていきましょう。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

ゼミ生の関心や問題意識を踏まえたうえでそのつど使用テキストを選び、それをもとに議論し定期的に口頭発表し議論し合っていくことで、思考能力とプレゼン能力を鍛えます。

<4年次>

ゼミ論や卒業プロジェクトに向け、定期的に発表し皆で議論し完成度を高めていきます。

(2) ゼミ論の有無

あり（卒業プロジェクトなど形式に特別な希望等ある場合は相談に応じて考慮します）

(3) 評価方法

<3年次> 出席(30%)、議論等の授業貢献度(30%)、発表とファイナルエッセイ(40%)

<4年次> 出席(30%就活状況により相談可)、議論等の授業貢献度、ゼミ論と発表(40%)

3. 使用テキスト（あくまで参考まで）

眞嶋亜有『「肌色」の憂鬱—近代日本の人種体験』（中公叢書、2014年）

眞嶋亜有「水虫—近現代日本の栄光とその痕跡」園田英弘編『逆欠如の日本生活文化—日本にあるものは世界にあるか』（思文閣出版、2005年）ほか、そのつど指示します。

4. 応募学生に望むこと

私たちは様々な人々との交流や関わり合い、そして対話によって、自分を知る機会を得ています。したがって、様々なことに知的関心や問題意識を抱き、人の意見とその多様性を尊重したうえで、自分の意見を持ち、皆と共有し学び合う意志のある学生を希望します。

5. 選考方法

入室希望理由を踏まえた作文と面接（個別ガイダンスで詳細説明するため要出席のこと）

6. 演習入室までに学習してほしいこと 日々の生活で何気なく抱く問いや関心は将来設計において重要な示唆に富んでいますから、その感性と問題意識を大切にしてください。

7. その他 日本のグローバリゼーションに関心をもつ留学生も大いに歓迎します。

21 溝辺 泰雄 准教授

1. 演習のテーマ

私たちの演習は「明治大学アフリカ研究会」として活動しています。この研究会は、衣食住から政治経済まで幅広くアフリカについて学んだうえで、実際に現地を訪問して生のアフリカを体験し、その成果を一般にわかりやすく伝えることを目的としています。そのため本演習は、原則として【サハラ以南アフリカに行く(または)本気でいきたいと考えている】方を歓迎します(これまでに15名以上のメンバーがウガンダ、ケニア、南アフリカ、ガーナ、セネガルなどの国々を訪れています)。*活動内容の詳細は、以下のホームページをご覧ください:

アフリカ研究会ホームページ
<http://africakenkyukai.org/>

2. 演習内容

(1) 演習の進め方

<3年次>

演習初年度となる3年次は、アフリカ地域研究に関する基礎を習得することに加え、春学期は【スライドを用いたプレゼンテーション能力の養成】、秋学期は、【学術調査の方法の習得と論文作成能力の養成】を活動の主たる目的とします。具体的な活動は以下の通りです:

- ①各参加者の関心テーマに基づく、個別調査と報告
- ②アフリカを中心とした国際関係上の主要問題に関する調査と報告(グループワーク)*
*年間を通して1つのテーマについてメンバー全員で共同研究を行います
- ③【希望者のみ】アフリカ渡航計画の構想・現地滞在
- ④アフリカ関連イベントへの参加(半期に一度ずつ)

<4年次>

演習2年目となる4年次は個人研究が中心となります。具体的な活動は以下の通りです:

- ①各参加者の関心テーマに基づく、個別調査と報告
- ②高校での「アフリカ入門」授業案の作成と実施
- ③卒業研究の作成・最終報告会での発表
- ④【希望者のみ】フリーペーパーの編集と出版(Adobe ソフト等を使います)

(2) 卒業研究

希望者のみ: 芸術活動やボランティア活動など論文以外の形式での卒業研究でも構いません。これまでも卒業論文に加え、アフリカ滞在の写真集の作成や創作衣装の制作と発表会などの卒業研究をおこなったメンバーもいます。

(3) 評価方法

<3年次><4年次>とも研究会活動への積極性にに基づき評価します。*無断欠席は、履修放棄とみなします。

3. 使用テキスト

入室決定後にお伝えします(英語で書かれたテキストを用いる予定です)。

4. 応募学生に望むこと

本演習が対象とする研究領域は、サハラ以南アフリカ地域に関するものであれば、政治・経済・文化・社会・歴史など、あらゆる分野を含むものとします。参加の条件は、アフリカ地域への強い関心と当該地域の諸テーマを「学ぶ」意欲の有無です。また、可能であれば、個人旅行(もしくは留学・スタディーツアー・インターンシップ)などの機会を利用して現地を経験してもらいたいと考えています。ケニアもしくはガーナ共和国の場合、担当者が現地でサポートすることも可能です(その場合も現地集合・現地解散が基本となります)。

5. 選考方法

書類審査と面接で選抜します。1次募集の応募者の数に関わらず2次募集は原則実施しません。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

*原則として、2年次以降開講科目「世界のなかのアフリカ A」の受講を応募条件とします。

7. その他

本演習は、3年次に個人報告とグループワークを集中的に実施します。また2016年度は、通常のゼミの時間以外(金曜日の夜)に「スワヒリ語勉強会」と「イラストレーター勉強会」を実施する予定です。なお、入室を希望される方は、事前に研究会(木曜 5+6 限 505 教室)を見学されることをおすすめします。

22 美濃部 仁 教授

1. 演習のテーマ

哲学。(このゼミは、参加者がそれぞれ自分の関心にしたいがい、あるいは自分の関心をさぐりつつ、自分を取りまく世界や自分自身の中に問題とすべきことを見出し、それをその根源にまで立ち戻って明らかにする——それが哲学ということですが——ということを中心におこなわれます。その準備として全員で一冊の本を読む、というようなこともしています。どのような問題にどのように取り組むかは各人の自由に任せられていますが、私がこれまで主に勉強してきたのは、哲学、宗教学、倫理学等ですので、専門家として助言ができる領域はそのあたりに限られています。)

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

この授業は、参加者の哲学的関心に沿う形で進めます。ですから、予め「進め方」を細かく決めてはいませんが、ほぼ次のようなことを考えています。

<3年次>

春学期のゼミの進め方については、最初の回に皆で相談して決めます。皆で少し難しい本を一冊読むというやり方もありますし、毎回参加者全員が、その週に本を読むなどして気づいたこと、考えたことを発表し、それについて意見交換をするというやり方もあります。夏休みまでに、自分の勉強のテーマを見つけることを目指します。

秋学期には、自分の考えを組み立て、少しまとまった発表をする機会を設ける予定です。

<4年次>

論文の構成を考えたり、細部について議論したりしながら、勉強の成果をまとめるような形で授業を進める予定です。

(2) ゼミ論の有無

有り。

(3) 評価方法

<3年次> 授業での発表・発言によって評価します。

<4年次> 授業での発表・発言と論文によって評価します。

3. 使用テキスト

こちらから予め指定するものではありません。

4. 応募学生に望むこと

自分自身で問題を見出し、自分自身で考えるようにしてください。

できるだけ二つ以上の外国語に親しんでほしいと思っています。

5. 選考方法

面接。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

できれば私が担当している講義「宗教と哲学」を履修しておいてください。

7. その他

とくにありません。

23 宮本 大人 准教授

1. 演習のテーマ

「メディアと大衆文化／サブカルチャー」

大衆文化（マス・カルチャー／ポピュラー・カルチャー）やサブカルチャーの領域の様々な問題を、そのメディアとの関わりにおいて考えます。マンガ、アニメ、テレビ番組、広告、お笑い、ポピュラー音楽などの表現ジャンルに限らず、ファミリーレストランやコンビニなどの大衆的な生活・消費文化、さらにはオリンピックやプロスポーツの大会などの、いわゆるメディア・イベントも視野に入れます。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

3～5名のグループで共通の課題に取り組むグループ発表や、受講者それぞれの関心に即した個人発表を中心とする。これを通じて、発表を準備するための参考文献・資料の探し方や分析の方法論を学び、多少難解な学術論文も読みこなせる読解力、効果的なプレゼンテーションの技法、6000字から10000字程度のある程度まとまった分量の論文の作成能力、活発なディスカッションを行うコミュニケーション能力などを、実践的に培っていく。具体的なスケジュールは受講者数や受講者それぞれの関心の傾向を踏まえた上で決める。夏休みに3泊4日のゼミ旅行（参加必須、関西方面の予定）を行う。

<4年次>

3年次の終わりまでに卒業論文のテーマを設定し、4年次においてはその準備、執筆を進めていく。もちろん、グループ発表、個人発表、文献講読等、ゼミ全体での活動は3年次同様、継続する。詳しいスケジュールは当該年度の初めまでに決める。夏休みにセミナーハウスで卒論合宿を行う予定。課外活動等については3年次のゼミ生と一緒にを行う。

(2) ゼミ論の有無

有り。20000字以上の卒業論文をまとめ、ゼミ全体の卒論集を制作し、学外でも販売する。

(3) 評価方法

発表（30%）、ディスカッションへの貢献度（30%）、期末の課題（30%）、平常点（10%）。

3. 使用テキスト

そのつど指示します。

4. 応募学生に望むこと

ゼミは、部活のようなものです。担当教員はコーチに過ぎず、実際にplayするのはみなさん自身です。このゼミがみなさんにとって充実したものになるためには、みなさん自身の積極的な参加が必要です。

幅広い題材を対象にしてよいゼミですので、集まる人の趣味やライフスタイルも様々だと思います。したがって、「自分と違うタイプの人」と付き合う意欲を持っている人を求めます。いわゆる「社交的な」人である必要はありません。人とのコミュニケーションが苦手でも、とにかく自分の殻に閉じこもらない意欲と努力を見せてほしいということです。

5. 選考方法

事前提出の課題と面接。詳しいことは個別ガイダンスで説明するので必ず出席すること。個別ガイダンスに出席していない場合は選考を受けられない。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

特になし。

7. その他

24 森川 嘉一郎 准教授

1. 演習のテーマ

マンガ・アニメ・ゲーム／デザイン／都市

マンガ・アニメ・ゲームおよびそれらに近接するポップカルチャー、デザイン、そして現代都市に関するさまざまな調査・研究を行う。自分で創作的な「作品」を制作し、その公表や流通を成果とするような研究も受け入れる。これまで、同人誌の制作・頒布、展覧会やイベントの企画・実施、動画制作、スマートフォンのアプリ制作など、さまざまなことに取り組む学生がいた。また、英語による発表や論文も可とする。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

春学期は各々の関心領域に沿って、基礎的な文献の洗い出しや、さまざまな調査法の試行を行い、発表とディスカッションを繰り返しながらテーマ設定や資料の採取源、達成目標を明確にした研究計画を作り上げる。秋学期はフィールドワークや取材に重心を移す。各期末には、経過を冊子状の提出物にまとめる。就職を希望する業種によっては、就職活動のポートフォリオの一部となるように作成してもよい。

<4年次>

3年次にまとめた成果と経験を下敷きにしなが、研究計画を再構築し、研究の範囲に歴史的・社会的な奥行きを与え、ゼミ以外の場でも読まれるに足るような「本」にする。併行して、関連分野の古典的な書物の読書体験を積むための読書会を行っていく。

(2) ゼミ論の有無

有り

各々の研究を自分の実績として、将来的な自己プレゼンテーションの材料として活用しやすいように、研究の成果を各期末にそれぞれ1冊の本に仕上げる（創作的な「作品」を制作する場合はそれに合った形態でもよい）。

(3) 評価方法

発表（40%）、提出物（40%）、平常点（20%）。

3. 使用テキスト

各々のテーマに沿って適宜指示する。

4. 応募学生に望むこと

ゼミのホームページ (<http://homepage3.nifty.com/akihabara/seminar/>) を見ておくこと。研究したい事柄が、応募の時点である程度思い描けていることが望ましい（後から変更してもよい）。

5. 選考方法

作文と面接（詳細は個別ガイダンスの際に指示する）。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

ゼミで研究してみたいと考えているトピックについて、試しに関連する文献を探し、読んでみるのが望ましい。作品を作りたいと考えている人は、試作をはじめしてほしい。

7. その他

フィールドワークや取材を体験するための校外実習を適宜開催する予定。

25 山脇 啓造 教授

1. 演習のテーマ

多文化共生社会の構想

少子高齢化とグローバル化が進展する中、日本を含む先進諸国にとって、国籍や民族などの異なる人々が共に生きる多文化共生社会の形成は喫緊の課題といえます。多文化共生の意義を学び、ローカルな課題に取り組みながら、地球時代に生きるためのグローバルな素養を身につけます。具体的には、2020年の東京五輪を控え、グローバル都市構想が検討され、多文化共生への関心が高まる東京都（新宿区や中野区）における多文化共生の課題について、調査研究を行います。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次> まず、日本における外国人受け入れに関する様々な文献を読み、ビデオをみます。その後、新宿区や中野区などでフィールドワークや調査を行い、政策提言をまとめます。

<4年次> 学生がそれぞれ、多文化共生社会の形成における特定の課題を取り上げ、卒業論文・制作を完成させます。3年次のプロジェクトを継続してもよいです。

(2) ゼミ論の有無

任意（書く場合は8000字程度）。

(3) 評価方法

<3年次> 平常点（30%）、発表（40%）、報告書（30%）

<4年次> 平常点（30%）、発表（20%）、論文・報告書（50%）

3. 使用テキスト

テキストは特にありません。英語の文献も使います。

4. 応募学生に望むこと

①討論：毎回のゼミで積極的に発言できる人。②行動：外国人の多い地域をいろいろ訪ねるので、フットワークの軽い人。③共生：様々な文化背景を持った人。留学生（ET生を含む）の参加を歓迎します。なお、毎回の出席が原則として求められます。（サークルなどを理由とした欠席は認められません。）

5. 選考方法

志望理由書（以下のサイトからダウンロード：

<http://intercultural.c.ooco.jp/index.php/vision/univ/seminar>）と面接。選考のポイントは、多文化共生に関する問題意識、論理的思考力とコミュニケーション力です。（留学中の学生もスカイプで面接します。面接日は時差の関係で学部が定めた日と異なる場合があります。）

6. 演習入室までに学習してほしいこと

学部設置科目の「多文化共生論」履修者を優先します。

7. その他

<合宿の予定>

3年次：4月23・24日、9月上旬（海外）。4年次：未定。

26 横田 雅弘 教授

1. 演習のテーマ

「ヒューマンライブラリーの実施とライフストーリーの執筆」

2000年にデンマークで始まったヒューマンライブラリーは、マイノリティの方々が集まり、「本」として貸し出され、「読者」がその人生の物語に耳を傾けるとい世界50か国以上で実施されているイベントである。3年演習では、その理念の学習、交渉、広報、資金調達、当日の運営等全て行う。4年演習では、マイノリティの方を対象に、社会学のライフストーリー・インタビューという手法で個人的に対話し、聞き取り、その方の人生の物語を書き上げる。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

ヒューマンライブラリーを中野キャンパスで実施する。この催しの詳細については HP (<http://humanlibrary.org/what-is-the-living-library.html>) を参照願いたい。演習では、偏見についての基本概念、ヒューマンライブラリーの趣旨、歴史、開催の要領などを学び、実際にさまざまな「本」の候補者に連絡をとり、説明し、参加の同意を得る。一方、読者への広報活動や企業訪問などによるファンディング活動を行い、年末に実施する。実施後はその効果の測定と自らの学びの振り返りを行う。

<4年次>

3年次のヒューマンライブラリー実施の経験を通して学んだ多様な人々との出会いを、4年次ではライフストーリー(インタビュー)という形で記述する。ライフストーリーとは、語り手が聞き手との対話を通して人生を振り返り、紡ぎ出す人生の物語であり、社会学の質的研究法として注目されている。学生は聞き手として自分が対象と決めた語り手の声に耳を傾け、そのインタビュー記録を書きお越し(一次資料)、それをもとに語り手の紡ぐ物語を記述する。ここに生まれた作品がゼミ論文となる。

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> 発表(30%)、平常点(30%)、レポート(40%)。全回出席は大原則。

<4年次> 発表(30%)、論文(70%)。全回出席は大原則。

3. 使用テキスト

① HP、②これまでの実施報告書、③『多文化社会の偏見・差別～形成のメカニズムと低減のための教育』加賀美・横田・坪井・工藤編著、明石書店、1-225、2012。④『ヒューマンライブラリー事始め』駒澤大学社会学科坪井ゼミ編著、人間の科学社、2012。⑤『インタビューの社会学～ライフストーリーの聞き方』桜井厚著、せりか書房、2002。

4. 応募学生に望むこと

研究テーマに対する真摯な関心と熱意があり、研究の方法論をしっかりと学ぶ必要性を認識し、プレゼン力をつける意欲を有し、それをもとに自らの学部時代の宝物としてゼミ論文を書き上げるという高い意識と誠実な気持ちと強い意欲のある学生を求める。

5. 選考方法

志望動機等についての書類と面接(詳細は個別ガイダンスの際に指示する)

6. 演習入室までに学習してほしいこと

ヒューマンライブラリーについて HP や上記テキストなどでその概要を掴んで欲しい。

7. その他

ゼミ合宿を予定(時期と期間は授業開始後に相談の上決定)

27 吉田 悦志 教授

1. 演習のテーマ

歴史小説を読むー坂本龍馬・勝海舟・土方歳三たちー

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』『燃えよ剣』、浅田次郎の『壬生義士伝』『一刀斎夢録』など、幕末維新期を素材にした歴史小説を味読します。読むことと、話し合うことと、関連する「場」を歩くこととを大切にします。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

基本はまず、坂本龍馬や勝海舟や新選組の土方歳三たちを描いた歴史小説を読みます。司馬遼太郎の『竜馬がゆく』や『燃えよ剣』を春学期中に読みます。読んで話し合います。龍馬も歳三も、前を向いていたか後ろを向いていたかは別として、それぞれの「義」のために戦い倒れました。「義」の重さは同じかどうか、「前」とは「後」とは何か、などみなで語り合います。「読み-集い-語り-歩く」、そんな演習になります。京都など（話し合い）フィールドワークを行います。

<4年次>

3年次に読んだ司馬遼太郎や浅田次郎の歴史小説を基礎に置きながら、さらに司馬遼太郎の幕末小説や浅田次郎の新選組3部作を読んでいきます。『壬生義士伝』など関連映画も鑑賞します。そして「共同制作卒業課題文」を何にするかなどを話し合い、執筆します。江戸散歩や幕末「旅」合宿を企画し実施します。「読み-集い-語り-歩く」が基本のゼミ。

(2) ゼミ論の有無

なし。

(3) 評価方法

<3年次> プレゼン点 (50%)、司会点 (40%)、議論点 (10%)

<4年次> プレゼン点 (50%)、司会点 (40%)、議論点 (10%)

3. 使用テキスト

司馬遼太郎、浅田次郎など作品収録文庫本

4. 応募学生に望むこと

「読み-集い-語り-歩く」ことが好きな人であること。

5. 選考方法

4を確認するための、簡単な面談を行います。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

司馬遼太郎『竜馬がゆく』(8巻)を読み始めてください。

7. その他

28 渡 浩一 教授

1. 演習のテーマ

世界史の中のニッポン文化史（日本的とは何か）

日本の文化史を世界史的な視野から見つめ直し、「日本的とは何か」について考えます。たとえば、異文化との接触・衝突・融合、外来文化の選択・受容とその日本の変容といった観点から日本文化史を捉え直してみたいと思います。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

春学期も秋学期もテキストを議論しながら輪読していきます。必要に応じて、議論を踏まえた発表・討論も随時行います。

<4年次>

春学期は、原則として3年次の続きをやりながら、同時に、演習テーマに沿ったゼミ論の構想を練り上げていってもらいます。秋学期は、ゼミ論の中間報告をひとり2、3回ずつしてもらいます。

(2) ゼミ論の有無

20,000字程度の論文を提出してもらいたいと考えています。

(3) 評価方法

<3年次> 原典読解・発表（50%） 発言回数・内容（50%）

<4年次春学期> 原典読解・発表（50%） 発言回数・内容（50%）

<4年次秋学期> 論文（80%） 発言回数・内容（20%）

3. 使用テキスト

不干斎ハビアン(1565~1621)著『妙貞問答』『破提字子』（プリント配布）。元々禅僧だったハビアンはキリスト教に入信してイエズス会のイルマンになり護教書『妙貞問答』を著したのですが、後に棄教して排耶書『破提字子』を著しました。ただし、入室者と相談のうえ変更もありえます。

4. 応募学生に望むこと

ニッポンが好きで、ニッポンのことをもっと知りたい、ニッポンやニッポン人について深く考えてみたいという人を歓迎します。

5. 選考方法

面接によります。

6. 演習入室までに学習してほしいこと

高校程度の日本史と古文読解の知識。

7. その他

ちなみに、交換留学生を除く過去の入室者は4, 0, 1, 1, 0, 1名です。従来の「外国人の見た日本・日本人」というテーマを来年度から変更することにしました。

29 Ryan Ward 専任講師

※この演習は、学生の希望があれば英語でも指導します。

1. 演習のテーマ

「死」の日本宗教史

本ゼミの目的は、多角的な（歴史学的、人類学的、美術学的、宗教学的な）視点を用いて、古代から現代に渡る、日本の宗教史における「死」の意味合いとその歴史の変遷を共に考えることにある。また、日本に限定することなく、なるべく洋の東西（東アジア、インド、中東、ヨーロッパ、など）の宗教史についても考察範囲とし、より比較的な検討を行うように努めていきたい。

2. 授業内容

(1) 授業の進め方

<3年次>

進行形式としては、日本の宗教史と「死」の基礎知識を学びつつ、事前に学生諸君に読んでおいてもらうべき学術論文を担当学生に簡単な要約をしてもらった上、ディスカッションをする。

<4年次>

同上

(2) ゼミ論の有無

有り

(3) 評価方法

<3年次> 平常点（40%）、発表（30%）、レポート（30%）で行う。

<4年次> 平常点（20%）、発表（20%）、論文（60%）で行う。

3. 使用テキスト

プリントを配布する。

4. 応募学生に望むこと

積極的にゼミに参加する学生を望みます。

5. 選考方法

面接（詳細は個別ガイダンスの際に指示します。）

6. 演習入室までに学習してほしいこと

特になし。

7. その他

ゼミ合宿（場所検討中）を行う予定です。

4. 演習入室試験申込手続きについて

入室試験（一次・二次）の申し込みは、Oh-o! Meiji ポータルページに配信されるアンケートを利用して行います。申込手続き方法は以下のとおりです。

- 1 「Oh-o! Meiji システム」(https://oh-o2.meiji.ac.jp/portal/index) のポータルページへログインしてください。Oh-o! Meiji システムのポータルページへのログインには、共通認証パスワードが必要になります。忘れてしまった場合は速やかに事務室窓口にて再発行の手続きをしてください。電話による再発行の問い合わせは受けません。
- 2 自身のポータルページが表示されます。受付期間になったら、アンケート「2016 年度演習入室試験一次申込手続き」を選択してください。

- 3 「2016 年度演習入室試験一次申込手続き」の画面が表示されますので、必要情報を全て入力してください。

- 4 すべて入力したら、「確認画面に進む」を選択してください。※まだ申込完了ではありません。

09 瀬川 裕司
10 田中 牧郎
11 旦 敬介
12 張 競
13 長尾 進
14 野村 清
15 萩原 健
16 姫野 伴子
17 廣森 友人
18 溝辺 泰雄
19 美濃部 仁
20 宮本 大人
21 森川 嘉一郎
22 山脇 啓造
23 横田 雅弘
24 吉田 悦志
25 渡 浩一
26 Ryan Ward

上記内容でよろしければ「確認画面に進む」ボタンをクリックして次に進んでください。

保存せずに前の画面に戻る 確認画面に進む

- 5 入力内容の確認画面が表示されますので、必ず入力内容を再度、確認してください。問題がなければ「回答する」をクリックしてください。入力内容に修正を加える場合は「前に戻る」を選択し、修正してください。

設問8 よく使用するE-Mailアドレスを入力してください。【必須】
gjs@mics.meiji.ac.jp

設問9 入室を希望する演習を1つ選択してください。【必須】
23 横田 雅弘

← 前に戻る

回答する

Page Top

入力内容確認画面を確認後、「回答する」をクリックすれば、申込完了です。

※申込内容は期間内であれば修正することができます。

※上記は一次申込手続きを例に挙げましたが、二次申込手続きも同様の手続きとなります。

※三次試験については申込方法が異なります。二次試験合格発表時に発表される三次募集選考試験の指示に従ってください。

2016 年度 国際日本学部演習案内

2015 年 9 月 24 日

編集・発行

印刷・発行

明治大学国際日本学部
東京都中野区中野 4-21-1

印刷所

株式会社 三響社